

---

# 反対呪文

カイリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

反対呪文

### 【ΖΖΠード】

Ζ4903A

### 【作者名】

カイリ

### 【あらすじ】

クディイッチの試合の日、男は少年にかけられた呪いを解くべく、少年を見つめていた。その脳裏に、少年の両親とある約束を交した夜のことが浮かんでくる。

## (前書き)

このお話を設定としては、“賢者の石”でスネイプ教授がハリーの  
篇にかけられたシーンのスネイプ教授の心境…………となつております。  
やや原作と噛み合わない点もありますが、そこは軽く流して頂  
けると幸いです。御容赦ください。

幕にまたがつて大空を飛び回る少年は、ヤツの面影をしつかり残していた。死して11年も経つのに、憎むことすら許さないあの男。その息子を助けることで、あるいはあの頃のことを思い出にできるのなら。

\*

「…………何の用だ」

月の綺麗な夜だつた。まどろみかけていたセブルス・スネイプは、突然の訪問者に向けて冷たくそう言い放つ。

「やア、スニベリー。久しぶりだな。お邪魔させてもらひつよ」

「元気そうね、セブルス」

ジエームズ・ポッターとリリー・エバンズ 否、リリー・ポッターはセブルスの許可も得ずに屋敷に上がり込んだ。リリーの腕の中では、赤ん坊が小さな寝息をたてている。

「…………オイ、勝手に入るな」

セブルスはこめかみを押されて一応一人に言う。が、一人はまるつきりセブルスの言葉を無視してリビングの戸を開けた。

二人の身勝手は、まるで変わつていなかつた。

「で？ 何の用だ？ 夜に赤ん坊を連れ歩くとは親の風上にも置けないな」

セブルスが二人の腰掛けたソファの向かいに腰を下ろしながら問う。茶を出してやる気など毛頭ないようだ。

「ふふつ。怒られちやつたわ、ジエームズ」

「まさか君に親の心得を説かれるとは思わなかつたな」

くすくすと笑う一人に、セブルスはあからさまに顔をしかめた。

「用がないならさつさと帰れ」

「あら、用ならあるわよ、ちゃんと。あのね、あなたにお願いがあるの」

リリーが優しく微笑む。

とくん、とひとつだけ、胸の太鼓が鳴った。

「この子がハリーよ。わたしたちの息子。シリウスが名付け親なの」  
聞いている。リーマス・J・ルーピンがご丁寧にもふくろう便を送つて寄越していた。

「まあ君は聞いたことがないかもしないが、産まれた赤ん坊が強い人間に育つおまじないがあつてね。その子どもの両親が最も信用している五人の人間にキスをしてもらえばいいらしい」

ジェームズがハリーの頬をつつきながら言つ。セブルスはしかめつ面のままハリーを見た。

「シリウス、リーマス、ピーター、ダンブルドアにはもうしてもらった。最後の一人を、お前に頼みたい」

ジェームズが躊躇う様子もなく言つ。側ではにこにことリリーがセブルスを見ていた。

「私に頼む内容ではないだらう、それは。根本的に私を選ぶのはお門違いだらう」

セブルスは嘲笑を浮かべて言つ。リリーがきょとんとした。

「どうして？」

「どうして、ではないだらう。私が貴様らを裏切らない確証がどこにある？」

それに私は、死喰い人だつたしな。セブルスは自嘲の色を濃くして口の中だけで呴く。　　このことは、ジェームズも承知しているはずだ。

「……どこにもないな」

ジェームズも嘲笑する。リリーが眉根を絞つた。

「ジェームズ！」

リリーに笑顔を見せ、ジェームズは再びセブルスに向き直る。

「だが、お前が俺たちを裏切る理由もないだろ」

「…………」

セブルスは毒氣を抜かれた。

私がこいつらを裏切る理由がないだつて？

馬鹿か、

こいつ。ホグワーツで何をしたのか忘れているのか、この男は？

でも、と思い直す。ジエームズには大きなカリがある。ジエー

ムズたちを裏切る理由は十一分にあるが、この頼み事を断れる理由はなかった。

セブルスが思案を巡らせていくと、田の前の男はまた口を開く。

「ああ、言つておぐが、別にハリーを愛してくれなくともいいぜ」

「…………は？」

父親のものとは思えない台詞に、セブルスは思わず聞き返した。  
「むしろ、憎んでほしい。お前の持つ全ての憎しみをハリーに向けてほしい」

「…………言つている意味が分からん」

「そのままの意味さ。殺してやりたいほど憎め。…………その代わり、ハリーを守つてほしい」

「言つていることが矛盾しているが？」

セブルスはジエームズの言いたいことを図りかねている様子だ。  
ジエームズは、もどかしそうに溜め息をついた。

「だから、この世でハリーを殺すのはお前だけだ。お前がハリーをこの世で最も憎む人間になつてほしい」

それを聞いて、セブルスは顔をしかめた。…………つまり、ハリーを他の人間に殺されないようにしようと、そういうことを言つていいのだと気付いて。

「…………頼まれてくれるよな？」

一分の隙もない笑顔。

……この男はすごい。自分が私に憎まれていると知り、ハリーを憎めと言つたら喜んで憎むと踏んでいる。そのくせ、私がハリーを殺すはずがないことを知つていて。

全て見透かされているといつ訳だ。

悔しいが、頷く」としかできない。それは全て、否定しようがない事実だから。

「ありがとう、セブルス」

リリーが嬉しそうに微笑んだ。思わず目をそらす。

そんな顔で笑うな。

胸中で呟きながら赤ん坊を受け取る。優しい匂いがした。驚くほど軽い。

額に口付けると、ハリーは僅かに動いた。小さな手がセブルスの長い黒髪を掴む。

「……おい、放せ」

しかしハリーは、しつかりと髪を掴んだまま寝入つてしまつている。

「いいぞハリー！ そのまま引き抜いちまえ！ 少しは爽やかになるぜ」

「ポッター！ ふざけるなよ！ エバンズ、母親ならなんとかしろ！！」

セブルスがすっかり困惑してリリーを見ると、彼女はピタリとジェームズに寄り添つて彼を見ていた。

「ハリーーたら、すっかりあなたを気に入つたみたい」

「…………つおいつつ」

激しい突つ込みをいれたセブルスから、リリーはハリーを受け取る。

「そろそろ、おいとましょうかしら。ねえ、ジェームズ？」

「ああ。迷惑にもなるしね」

「…………既にもう十分迷惑なことに気付け」

セブルスは立ち上がるジェームズを冷ややかに睨んだ。

「そういえば、俺たち、明日引っ越すから」

「…………明日？」

「ちょっとヤバくなりそなんでな。守人はシリウスに頼んだ」

ジェームズがけろつと笑った。危機感なんて、微塵も感じてい

ないのではないかと思うほどだ。

「そういえば、教師になるそうね」

玄関でリリーは振り返った。

「まだ分からん」

「もしセブルスがホグワーツの教授になつたら、この子を教える日も来るのかも」

「優しくしてくれよな～」

ジェームズがセブルスの肩に手をのせる。

言われなくとも。 愛しい友。 愛しいヒト。 その一人の愛しい息子を、愛しこそすれ憎む理由などない。たとえ憎めと頬まれていても、心の底から憎むことなんて。

「じゃあな、セブルス。 頑張れよ」

「…………死ぬなよ」 セブルスの言葉に、一人は極上の笑顔を返した。それは、了解、だつたはずだ。

\*

ジョームズとリリーが死んだ、と。その事実は酷く重くのしかかつてきた。

「…………なぜ」

交したはずではなかつたか。最初で最後の約束を。

「…………なぜ、こんなことが…………！」

守人のはずのシリウス・ブラックが裏切り、二人の居場所を“名前を言つてはいけないあの人”に伝えたのだという。

ジョームズが唯一特別扱いしていた男だつたのに。ハリーの名付け親だつたのに。全てを持つていたのに。

「なぜ、裏切つた…………！ ブラック…………っ――！」

許さない、あの男を。そして、“闇の帝王” かつての主君、ヴォルデモート卿を。

\*

ハリー。お前は、似すぎている。ポッターとも、エバンズとも、  
ブラックとさえも。なぜ私を苦しめる? 愛すことも、嫌うことも、  
心から憎むこともできず 言葉や態度ばかりが妙に空回りする  
のだ。

なあ、ポッター。これで終りにするぞ。私はお前の愛しい息子  
を守る。それでお前との約束は果たされる。必ずや死なせはせん。  
だから、……。

息を詰め、少年をじつと見つめた。  
父親譲りの容姿、母親譲りの瞳。  
失わせない。もうあの一人を。

男は静かに“闇の魔術”に対抗する反対呪文を唱え始めた。

(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました。このお話の内容・設定について補足を何点か……。まずセブルスとジョームズの仲が良すぎるという気がしますが、そこはジョームズも父親となり、二人とも大人になつたので、そんなに険悪ではなかつたと思うのです。またセブルスにとって学生時代のことは、根に持つていたのでしょうか、そんなに悪くはない学生時代だったのでは?とセブルスは感じていたといふことにしておいてください(汗)。未熟で申し訳ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4903a/>

---

反対呪文

2010年10月9日02時31分発行